

明治維新直後の人々に、諭吉が、新時代にふさわしい学問をおおいにしようとする勇気付けた「学問のすすめ」全17歳を読みやすい口語訳で掲載。ベストセラーとなりながら、一方で強烈な批判を浴びた諭吉が憤然と筆を執った「学問のすすめの愚問」（現代語訳）、また諭吉の人物を語る読み物「エピソードからみた福沢諭吉」、毎年表紙表紙内を加工した、目にやさしい大きな文字で、読者家であり教育家の諭吉の人物と思想が理解できる。



9784043073030



1920137006678

ISBN978-4-04-307303-0

C0137 ¥667E

定価：本体667円（税別）



## 初編

### 学問をすれば、誰もが賢人になれる

学ぶか学ばないかで賢人か愚人かが決まる

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言われています。それは、天がこの世に人間を造り出したときから、すべての人はみんな平等で、貴いとか卑しいとかという違いはないということです。万物の中で一番優れた動物である人間は、肉体と頭脳の働きで自然界の資源を活用して衣食住の必要を満たし、自由自在に、しかも、互いに他人の生活を妨げることなく、それぞれみんなが安楽に生きていけるように、天が造ってくださったという意味なのです。

けれども、今、広くこの人間世界を見渡しますと、賢い人、愚かな人、貧しい人、豊かな人、地位の高い人、低い人と、その生き方や暮らしぶりに雲泥の差があるのは、なぜなのでしょうか。

その理由は、まことにはつきりしていません。

江戸時代、寺子屋の教科書として使われた「実語教」という本に「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあります。つまり、賢人と愚人との違いは、学ぶか学ばないかによって決まるのです。

世の中には、難しい仕事もあり、易しい仕事もあります。難しい仕事をする人は身分の高い人と言われ、易しい仕事をする人は身分の低い人だと言われています。一般に、頭を使う精神的な仕事は難しく、手足を使う力仕事は易しいとされています。ですから、医者・学者・政府の役人・実業家・大勢の奉公人を使う大農家などは、身分が高く偉い人と言っています。身分が高く偉い人は、当然経済的にも豊かであり、下層階級の人から見れば到底自分にはなれない世界の人たちなのですが、そうした隔たりのできたのはどうしてなのでしょうか。その根源は、ただ、その人に学問の力があるかないかの違いだけであって、天が定めた約束事ではないのです。ことわざにもあります。「天は富貴を人に与えずして、これを人の働きに与うるものなり」と。前にも述べた通り、人は生まれながらにして貴賤貧富の差があるのではなく、学問に励んだ賢人は、社会的に高い地位を得、経済的にも豊かになり、学ばなかった愚人は、貧しく、社会にも認められない人になるのです。

#### 日常生活に役立つ「実学」を学ぼう

12 学問をすれば、誰もが賢人になれる

学問とは、ただ難しい文字を知り、難解な古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るといった、実際の世の中に役立つ学問のことはありません。文学も人の心を豊かにして大変調法なものではありませんけれども、昔から世間の漢学者や国学者たちが言ってきたているほどには、あがめ貴ぶべき学問とは思われません。漢学者に家庭経済のやりくりの上手な人は少ないし、和歌を詠む人で商売に成功したという人も滅多にありません。そのため、心ある百姓町人の中には、我が子が学問に一生懸命なのを見ると、将来家の財産をなくすようになるのではないかと心配する者もありました。無理もないことです。つまり、その学問が非実用的で日常生活に役立つなかつたからです。

さて、このような実用に適應しない学問は置いておくとして、やらなければならぬのは日常生活に役立つ学問です。例えば、いろは四十七文字を習い、手紙の書き方、帳簿の付け方、ソロバンの練習、はかりの扱い方などを覚えることです。

そのほかにも、学ぶべきことはたくさんあります。地理学とは、日本国中はもちろん世界各国の風土の道案内をしてくれるものです。窮理学（物理学）とは、自然界すべての物の性質を見きわめて、その働きを知る学問です。歴史とは、年表を詳しくしたもので、世界各国の昔から現代に至る事柄を探索する書物です。経済学とは、二世帯の家計から国家財政に至るまでのことを説いたものです。修身学（倫理学）とは、自分の行いを正しくし、人とうまく交流して、社会人として生きていくための基本的なモラルを述べたものです。

これらの学問をするには、いずれも洋書の翻訳書を読んで勉強するのですが、大抵のことは易しい日本語に訳したもので間に合うでしょう。なかに、年若く才能のある人がいたら、横文字の原書も読ませます。どの科目どの学問も、事実を押さえ、検証し、その結果に基づいて道理を追求し、日常生活の用に役立たすべきてす。

人間誰もが普通に学ぶこうした学問を「実学」と言い、これは、人間である以上、貴賤上下の差別なく、誰もが身に付けるべき学問です。これを身に付けてこそ、身分や職業に関係なく、それぞれ自分の務めを果たし、家業を営んでいけるのです。そして、個人一人一人が独立し、一家が独立し、ひいては国家の独立につながっていくのです。

#### 学問をするには分限を知ることが大事である

学問をするには、分限（自分の身の程）を知ることが大事です。人は生まれた時から、つながれたり縛られたりすることなく、一人前の男、一人前の女として自由自在に生きられます。でも、自由自在ばかりを主張して分限を知らなければ、自分

勝手な我がまま者になって身を持ち崩すことになりませう。

分限というのは、天の定めた道理に基づいて、人間の心を大切に、他人に迷惑を掛けずに自分自身が自由に振る舞える限界のことです。自由と我がままとの境界は、他人に迷惑を掛けるのと掛けないのとの間にあります。例えば、自分のお金を使つてやることであれば、酒色におぼれて身をもち崩そうと自由ではないかと言えそうですが、決してそうではありません。一人の放蕩ぶりが、多くの人々に見本を示すこととなって周囲に悪影響を与え、ひいては社会の風俗を乱して、人間の正しい生き方を妨げます。使うお金はその人のものであっても、その罪を許すわけにはいきません。また、自由独立の問題は個人だけのことでなく、国の上にもかかわることです。我が日本は、アジアの大陸から離れた東の島国ですので、長い間外国と交流せず鎖国の中で自国の産物だけで生活し、不満に思ったこともありませんでした。嘉永年間（一八四一—一八四四）アメリカ人が渡来してから外国との貿易が始まったのですが、開港後も、鎖国だ攘夷だとかましく議論する者もありました。けれども、その考えは実に狭量で、ことわざに言う「井の中の蛙」取るに足らない議論ばかりでした。

日本も西洋諸国も同じ天地の中にあつて、同じ太陽に照らされ、同じ月を眺め、海を共有し、空気を共有し、互いに通い合う心を持った国民なのです。日本に余裕

のある物は外国に渡し、外国に余っている物は日本がもらい、教え合い学び合い、恥じることもなく誇ることもなく、互いに相手国の便宜を図り、幸せを祈るべきです。天理人道に従つて国際交流を深め、天理のためにはアフリカの奴隷にも過ちを詫び、人道のためにはイギリス・アメリカの軍艦をも恐れず、国が恥辱を受けたときには、日本国中の人民が一人残らず命を捨てて国の威光を守り抜くことこそ、一国の自由独立と言ふべきです。

それなのに、中国人などのように、自分の国以外に国はないというふうには、外国人を見ればただ野蠻人呼ばわりして、まるで四つ足で歩く獣類のように嫌い、むやみに外国人を追い払おうとして、かえつてその野蠻人に苦しめられているという例（アヘン戦争）も実際にあります。これなどは、実に自分の国の分限を知らない、人間で言えば、本当の自由とはほど遠く、我がままから身を持ち崩してしまつた者と言えませう。

#### 国民は政府に訴え出て議論する自由がある

明治維新以来、日本の政治は大きく変わり、国外的には国際法に基づいて外国と交流し、国内的には国民に自由独立の方針を示しました。平民に名字を名乗ること

と馬に乗ることを許したのは、日本の国が始まって以来の快挙でした。士農工商という四つの身分を同等にする基礎がこれによってできたと言えるのです。

これより後、日本国民に、生まれながらに決まっていた身分制度はなくなり、その人の才能・人徳と立場によって地位が決まることになりました。例えば、政府の役人を粗略にしないのは当然のことですけれども、それは、その人の生まれながらの身分が貴いからではなくて、才能・人徳によって公務を務め、国民のために貴い国法の施行に当たる任務を持っているからです。人間が貴いのではなくて、国法が貴いのです。旧幕府時代、東海道を將軍家御用の新茶を運ぶのに、ものものしい御茶壺道中というのがあつたことはよく知られています。そのほか、鷹狩り用の御用の鷹は人よりも偉く、御用の馬の通る道は旅人も遠慮して避けるなど、すべて御用の二字を付ければ、石や瓦でも恐ろしく貴いもののように見えたものでした。世の中の人も、ずっと昔からこうしたことを嫌いながらも、いつしかその仕来りに慣れて、こうした見苦しい風俗を続けてきたのです。こうしたことは、すべて法が貴いでもなく品物が貴いでもなく、ただ幕府の威光を広げるために、人を脅して自由を妨げようとする幕府の卑怯なやり方なのであつて、単なる虚勢にすぎません。

今日では、もはや日本国内にこのようなばかばかしい制度・風俗はなくなつたはずですから、人々は安心して、もしも政府に対して不平を抱くことがあつたら、陰で恨んでいないで正々堂々と訴え出て遠慮なく議論すべきです。天理・人情から出た訴えならば、命をかけても争うべきです。それがつまり、国民が分限を知つて行動するということです。

#### 自由独立のためには道理を知る国民でなければならぬ

前にも述べた通り、一身も一国も、本来天の道理に基づいて束縛されない自由なものですから、もし、一国の自由を妨げようとする者があつたら、世界中を敵に回すとも恐れることはないし、一身の自由を妨げようとする者があつたら、政府の役人であつても遠慮することはありません。まして、このごろは四民平等という基本も成立したことです。すべての人が安心して天の道理に従つて存分に持っている力を発揮すべきです。とは言え、人間にはそれぞれ身分がありますから、身分に応じて、それにふさわしい才能・人徳がなければなりません。才能・人徳を身につけるためには、物事の道理を知らなければなりません。物事の道理を知るためには、文字を学ばなければなりません。これがつまり、学問の普及を急がなければならぬ理由なのです。

最近の状況を見ますと、農・工・商に従事する人たちは、身分が以前の百倍も上昇して士族と肩を並べるほどの勢いになりました。農・工・商の人たちの中にふさわしい人物があれば、いつでも政府の役人に採用される道も既に開かれているので、すから、よく自己の身分を大切に思い、その責任の重さを自覚して、卑劣な行動をしないようにしなければなりません。

およそ世の中に、無知無学な民ほど哀れな、そしてまた不快なものはありません。知恵がないということは、結局は恥を知らないということに行き着きます。自分の無知から貧窮に陥り、飢えや寒さに苦しむようになると、自分自身を反省せずに、周囲の金持ちを恨み、極端な者は、徒党を組んで強訴一揆などの暴動を起こすこともあります。恥を知らないと言いましょるか、法を恐れなと言いましょるか。国の法律によって自分の身の安全を保ち、無事に一家の生計を立てていながら、利益だけは受けて、私欲のためとなればすぐに法を破るというのは、なんと筋道の通らない話ではありませんか。

また、たまたま良家に生まれて、相應の財産のある人でも、金銭を蓄えるだけで子孫を教育することを知らないという人もいます。教育を受けなかつた子や孫が愚劣であることは当然のことです。遊びほうけて、先祖からの財産をあつという間に使い果たす人が少なくありません。こうした愚かな民衆を支配するには、とても道理をもって論ずという方法は通用しませんので、ただ威力で脅すしかありません。西洋のことわざにある「愚民の上に苛き政府あり」は、このことを言うのです。これは、政府が苛酷なのではなくて、愚かな民が自ら招いた災いなのです。愚民の上に苛酷な政府があるというのは、良民の上には良い政府があるということでもありません。

#### 国民よ、快適な暮らしを求めて学問に志せう

ですから、今、我が日本国においても、我々国民があつて、その上に現在の政府があるのです。仮に、国民が守るべき道徳上の義務を今よりも怠つて、更に無学無知に陥れば、政府の法の規制は今よりも厳しくなるでしょうし、もし、国民が全員学問に志して物事の道理を知り、文明の風潮に進むならば、政府の法もいっそう寛大で情け深いものとなりましょう。法が苛酷になるか寛大になるかは、国民の品性によってどちらかの傾向が強まるのです。人間、だれが、苛政を好んで良政を嫌いましょるか。だれが、自国の発展を祈らないものがありましょるか。だれが、外国からの侮辱をあまんじて受けましょるか。それが、すべて人間の一般的な心情なのです。今の世に生まれ国の恩恵に報いようとする人が、どういう方法で報いようかと、

やたらに悩む必要はありません。国に報いる最も大切なねらいは、一人一人が、まず自分の行いを正し、学問に志し、知識を広げ、それぞれの身分に応じた知識と道徳を身に付けることです。そして、政府は施策を施行しやすいように、国民はその支配下で快適に暮らせるように、お互いに立場をよく理解し合つて、国の平和を守ることが、何よりも大事なことです。今、私の勧める学問も、まさにこの一事をめざしているのです。

#### 端書

このたび、私たちの故郷中津なかつに学校を開くにあたり、学問の目的を記して、同郷のふるい友人に読んでもらうためにこの冊子を作りました。ある人がこれを見て、この冊子を中津の人だけに読んでもらうよりも、広く世間に発表すれば、多くの人に役立つだろうと勧めてくれましたので、慶應義塾の活字の印版を使って印刷して、関心のある方々に読んでいただくことにしました。

明治四年末（1871年）十二月

福 沢 諭 吉  
小 幡 篤 次 郎 記

（明治五年二月出版）